

Niijima Yae & Aizu

ハンサムウーマン

八重と会津博

新島八重と会津

平成25年

大河ドラマ

八重の桜

放送決定

舞台は福島県

ハンサムウーマン 八重と会津博

新島八重

平成25年大河ドラマ「八重の桜」の主人公に

会津藩士の娘で、同志社大学創始者新島襄の妻

「新島八重」が決定しました。

生まれ故郷の会津若松市にある

福島県立葵高校(旧会津女子高)には新島八重直筆による

「明日の夜は 何国の誰か ながむらん

なれし御城に残す月影」

の和歌と「美德以為飾 (美德をもつて飾りと為す)」

の書が大切に保管されています。※会津女子高の前身
会津高女時代に交流があった。

動乱の幕末から激動の明治期を生きた

新島八重が後世に託したメッセージに

込められているものは…。

平成25年大河ドラマの主人公

「新島八重」の生いたちや足跡を辿ってみましょう。

女性の地位向上に 尽力した会津女性

会津藩校日新館の教授で大砲頭取であった兄・覚馬を頼り、八重は母や姉と共に京都へ移住。積極性のある八重は、そこで英語を学び、洋服を身にまとい、いち早く明治の新女性へと変身。新英学校女紅場(現在の京都府立鴨沂高等学校)の権舎長兼教道試補となる。

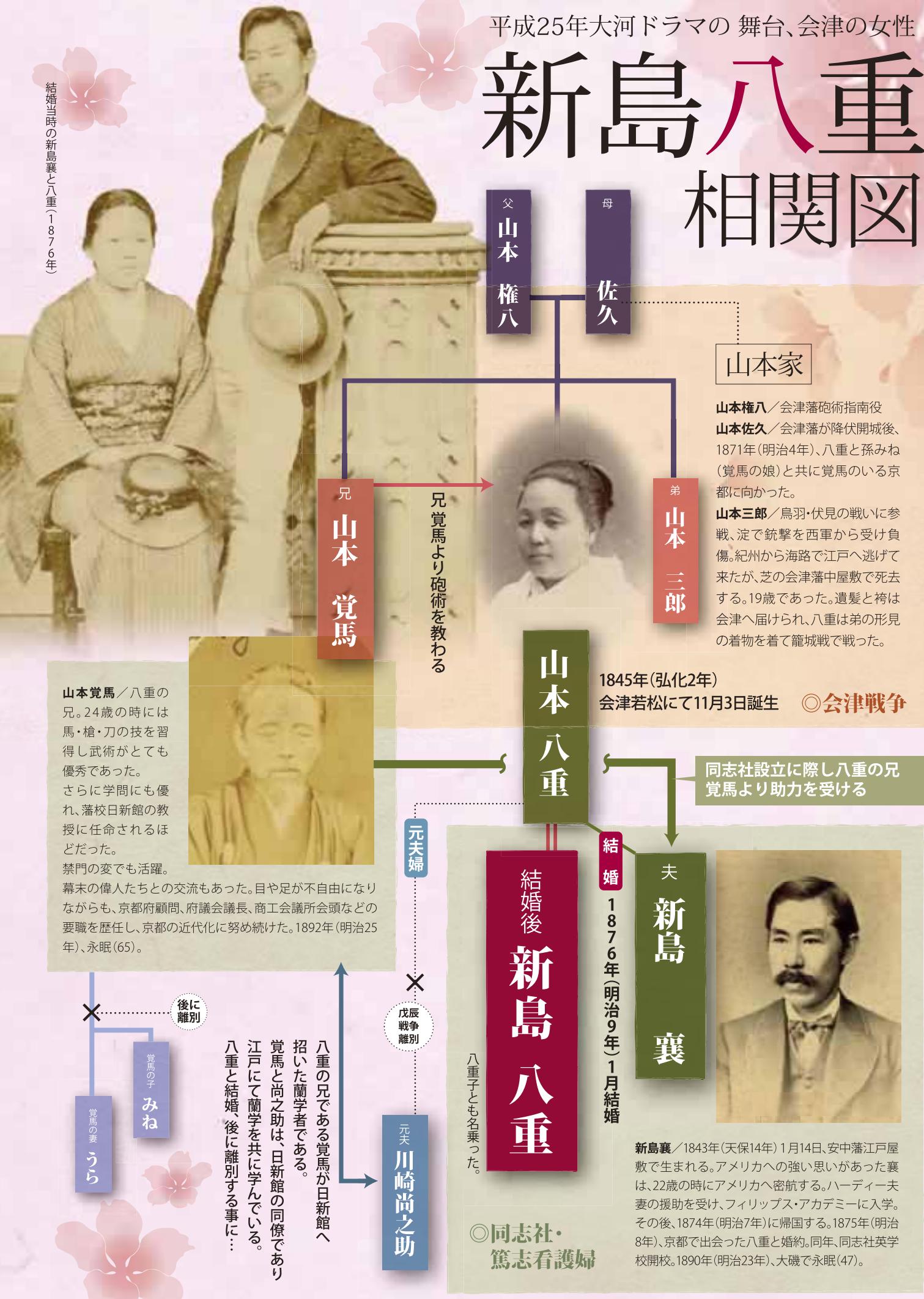
明治八年、後に同志社英学校を創設する新島襄と出会い、翌年京都で初めてのキリスト教式の結婚式を挙げた。その後、襄とともに同志社の運営に力を注ぎ、その発展の礎を築いた。西洋の思想と武士の誇り、道徳を併せ持つ八重は世間から悪妻、烈婦などと中傷されても動じず意志を貫いた。

しかし、頑健な体質ではなかった夫・新島襄は、ヨーロッパ旅行中に心臓発作を起こし、明治23年大磯で療養中、八重の腕の中で47歳の生涯を閉じた。兄・覚馬もその2年後に他界。

八重はその後、日本赤十字社の社員となり社会福祉事業に貢献。日清、日露戦争時には篤志看護婦として従軍し、傷病兵の看護にあたった。

晩年は茶道に親しみ、穏やかに過ごした。江戸、明治、大正、昭和と激動の時代を常に前向きに生き、昭和七年六月十四日、永眠。波瀬万丈の生涯を閉じた。

平成25年大河ドラマの舞台、会津の女性 新島八重 相関図



華麗なる3変身

新島八重
ポイント

八重年譜

1845年(弘化2年)
会津藩砲術師範の父・山本権八と母・佐久の娘として生まれる。

1865年(慶応元年)
この頃、川崎尚之助と結婚する。

1868年(慶応4年)
戊辰戦争で八重は鶴ヶ城に籠り西軍と戦うが、会津藩は降伏。川崎尚之助と離別。

1870年(明治3年)
兄・覚馬は京都府の顧問格に就任。

1871年(明治4年)
兄・覚馬のいる京都に移住。洋学を学ぶ。

1872年(明治5年)
女紅場(現在の京都府立鴨沂高等学校)の権舎長兼教道試補となる。

1875年(明治8年)
アメリカ帰りの新島襄と出会い婚約。
同志社英学校開校。

1876年(明治9年)
洗礼を受け、新島襄と結婚。京都で初めてのキリスト教式の結婚式を挙げる。

1877年(明治10年)
同志社分校女紅場(後の同志社女学校)開校時に礼法の教員となる。

1890年(明治23年)
夫・新島襄永眠。
その後、日本赤十字社の正社員となる。

1895年(明治28年)
日本赤十字社終身社員となる。
日清戦争で篤志看護婦として従軍。
翌年民間女性初の勲七等宝冠章を受ける。

1898年(明治31年)
京都婦人慈善会理事となる。

1901年(明治34年)
愛國婦人会京都支部創立委員、
同臨時評議員となる。

1905年(明治38年)
日露戦争時、篤志看護婦として従軍。
翌年、勲六等宝冠章を受ける。

1924年(大正13年)
皇后陛下の同志社女学校行啓の時に
単独謁見を許される。

1928年(昭和3年)
松平容保の孫・勢津子、秩父宮家に嫁入り。
昭和天皇即位の大礼の時に天盃を受ける。

1931年(昭和6年)
会津若松市の大龍寺(菩提寺)に
「山本家之墓」碑を建立。

1932年(昭和7年)
87歳で波乱の人生を閉じ、永眠。



1 ジャンヌ・ダルク説

弟の死、故郷の喪失
1868年~

会津戦争の敗北

幼少の頃から勉学に励み、会津藩に忠誠を誓い、世に恥じない立ち居振る舞いをすること、そして立派に死ぬことを教えられて育つ。白虎隊にも鉄砲の扱い方を教えていた。鳥羽・伏見の戦いで負傷し、亡くなった弟・三郎の形見の装束を身にまとい、銃を片手に、圧倒的な勢力を持つ西軍を相手に勇ましく戦った。その姿は「ジャンヌ・ダルク」を思わせる。



2 ハンサム・ウーマン説

女の生き方
1871年~

鉄砲から知識へ

京都に移住した八重は、英語を学び、洋服を着こなし、帽子を被り、靴を履き、明治の新女性として、また女性教育者として活躍。男女平等を望む八重の生き方は、まさしく「ハンサムウーマン」と呼ぶに相応しい。



3 ナイチンゲール説

幸せでなくてはならぬ
1890年~

弱者はいたわらなければならぬ
日本赤十字社の社員となり、日清戦争・日露戦争時は篤志看護婦として従軍し、傷病兵を看護。その後もさまざまな形で社会福祉に尽力。その功績をたたえ、「日本のナイチンゲール」と呼ぶ人もいる。

